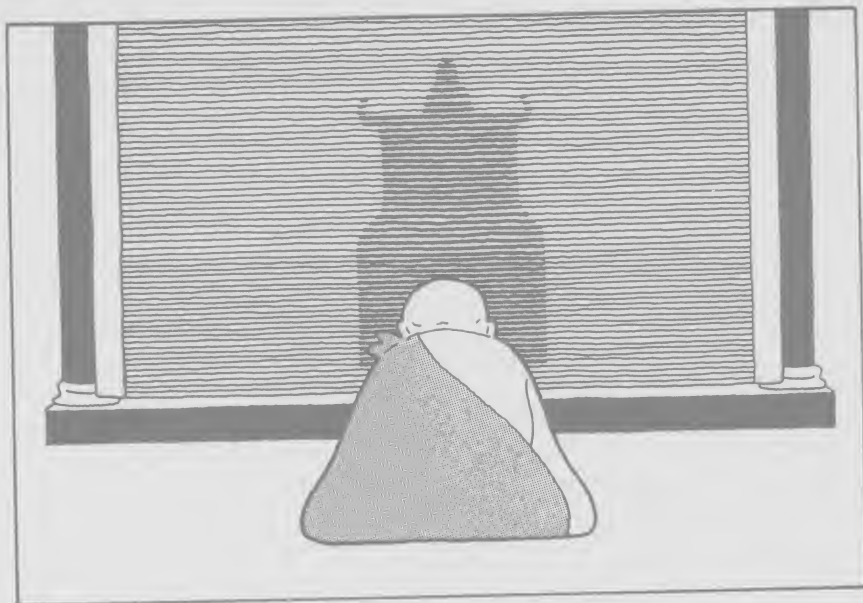
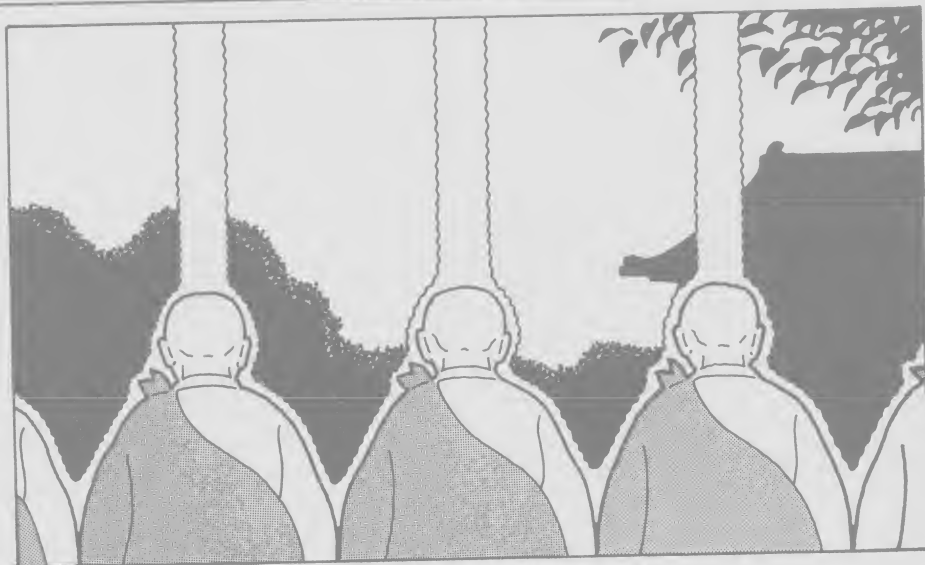
前回のあらすじ

空海が密教の全体像を入手して日本に帰ってみると、守敏とかゆう凡僧が法力を手品まがいにスペクタクルして良い気になっておる。空海は正義感から彼を打倒した。しばらくして都に日照りが続き、帝が空海に請雨の修法を命じた時のことである。七日間の祈禱にもかかわらず一片の雲さえ現れないので、何かあると感じた空海が心眼をこらして三千世界を見通したところ、雨を呼ぶ竜神らが守敏のまじないによって水瓶の中にとじこめられていた。

これでは雨はふらぬ、わしの負けかと倒れた空海を不思議な力が持ち上げ、はるばる天竺の無熱池まで運んだ。そこで彼は竜を見たのである。

守　敏
（後編）

ひさうちみちお

天竺の無熱池にただ一人守敏の呪力から逃れている善女竜王を発見した空海は、精根尽き果てた体の回復も待たず帝に修法の延長を奏請した。

帝はその後、二七日間の延長をお許しになり、再度苑内には読経の声がみちあふれたのである。

しかし、インドは遠い。延長戦に入って十日、二十日とたってもやはり都の上空にはちぎれ雲ひとつわだかまることがなかった。

守敏の呪力を逃れるほど遠い天竺の無熱池。その底深く眠る善女竜王を極東の神泉苑に勧請するなどやはり無理であったかと誰もが諦めたが空海だけは

と信じて疑わなかった。

そして二七日めの早朝、ついに奇蹟は起ったのである。

やったあ
善女竜王
やあ

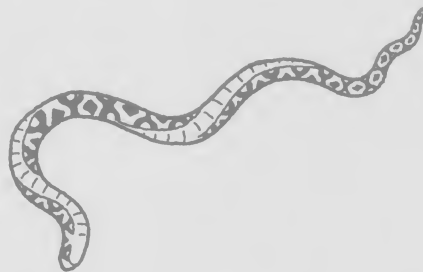
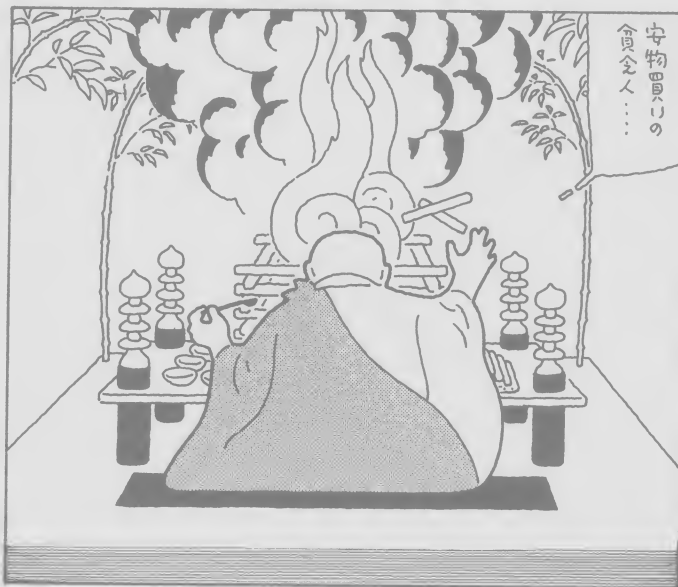
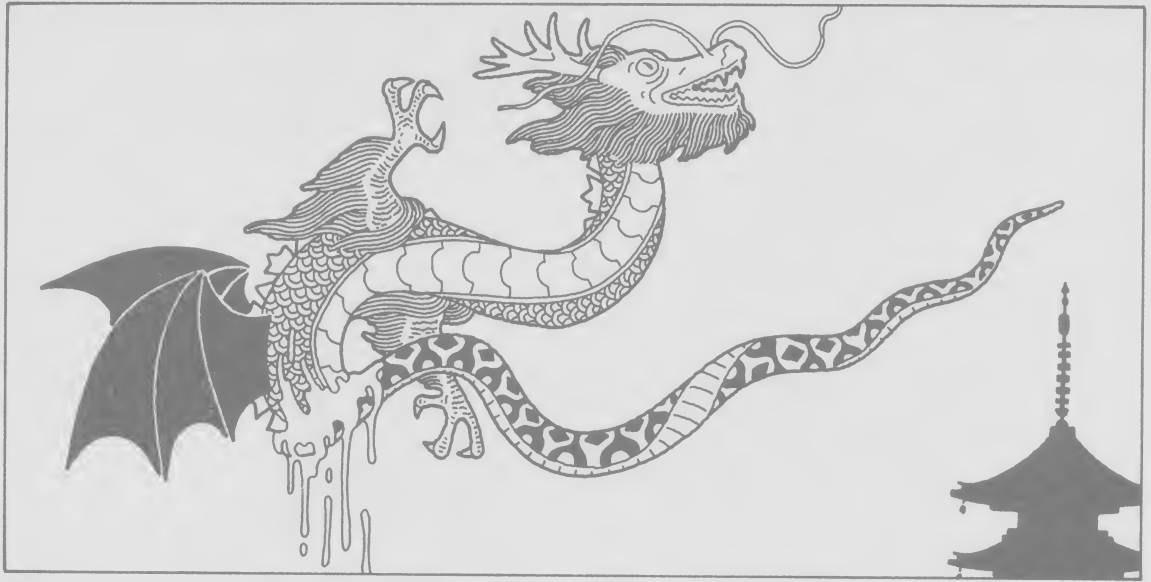
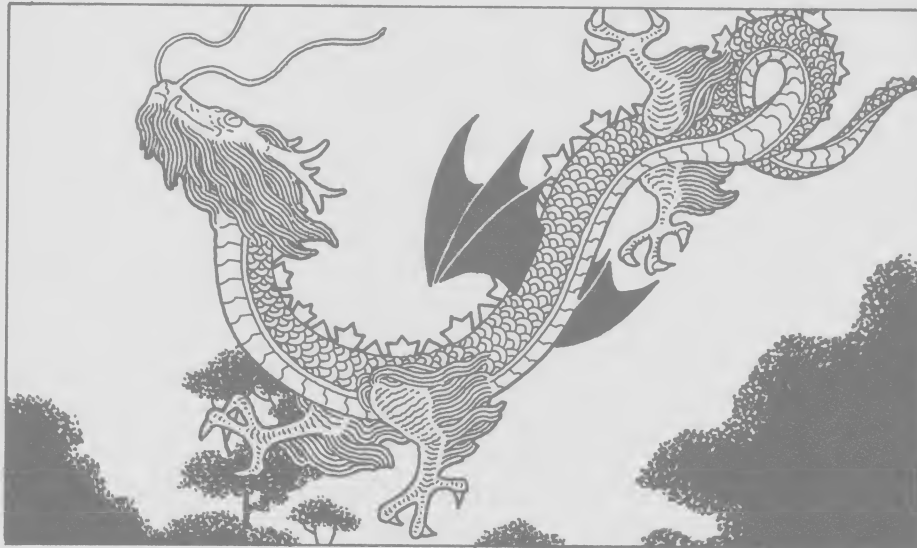
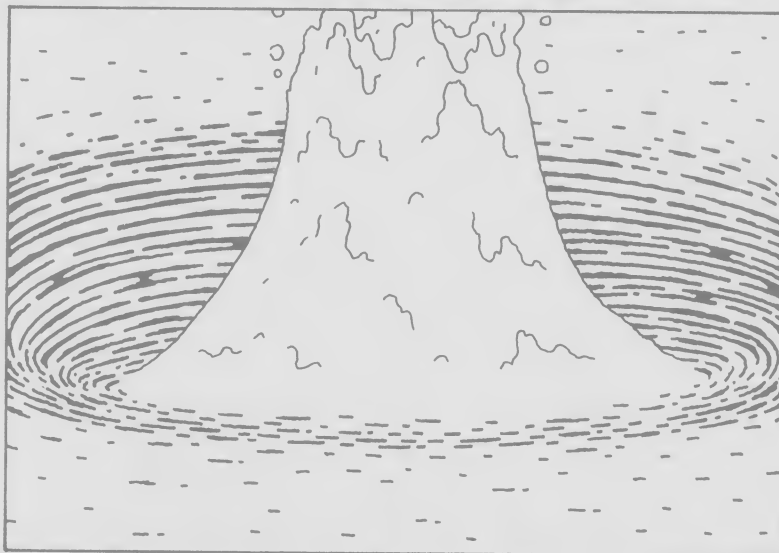
雨が
ふるぞお

〜

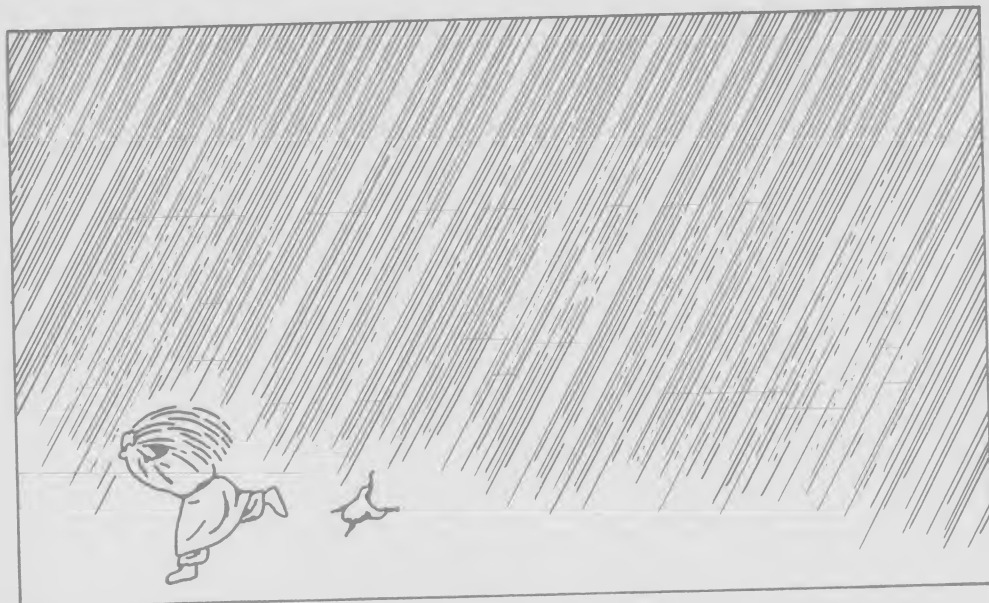
わあああああ

と言って喜んでいたのだが、その長細いものは実はちょっと大きめの蛇だった。

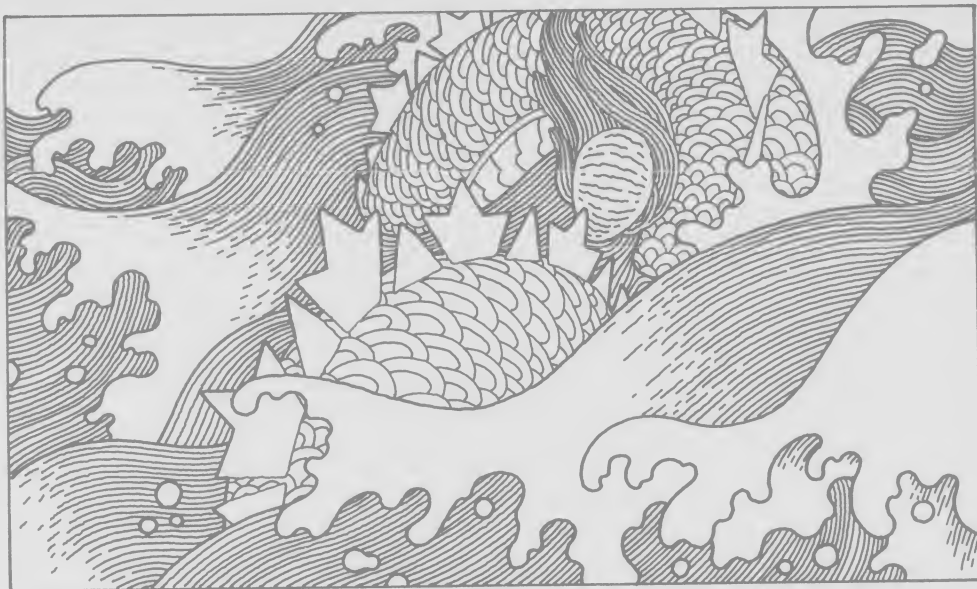
ええ?

竜とは
ちがう
んかいな

しかし空海は諦めなかった。

空海は正しかった。蛇が神泉苑の上まで飛んできた時、その頭が割れて中から竜が出てきたのである。

人々は再度希望をとりもどした。竜は歓声と読経の中をゆっくり下降し泉の中へ消えた。

すると泉の中ほどに渦が生じてそれはだんだん大きくなり

ついには大きな水柱となって盛り上り、中から善女竜王が現れたのであった。

オーッホッホッホッホ
善女竜王が地も裂けるような大声で笑うと、上空にはたちまち大きな灰色の雲が集まり
ザバーン
竜王はそのまま上昇して雲の中に消えて行った。

そして、同時に激しい落雷と豪雨が都を襲い、三日三晩続いた。

四日めにはとうとう大量の雨水をささえきれずに騂馬山から鉄砲水が押し寄せ、激流は鴨の土手を越えた。

市中は屋根の高さまで水があふれ、町衆は逃げまどいながら再度善女竜王の笑い声を聴いた。

空海が五重の塔に登って激流を見ていると、波のあいまに竜王の姿が見えた。

竜王は流れをけって上空へ登っていく時、口に何かをくわえているように見えた。

それは守敏だった。

竜王の笑い声はなにやら守敏が笑っているかのようにも聴えた。

完